（別紙様式＝中学校用）

都道府県番号	３４
都道府県名	広島県

【　①□　　②■　　③□　】

＊重点をおいた観点にチェックすること

Ⅰ　学校名及び規模

学校名	佐伯郡湯来町立湯来中学校					
学　年	１年	２年	３年	特殊学級	計	教員数
学級数	１	１	１	０	３	１３
生徒数	２１	１９	３４	０	７４	

Ⅱ　研究の概要

（１）研究主題

「基礎・基本を重視し，意欲的に学ぶ生徒の育成」
～基礎学力の確実な定着をめざす学習指導の在り方～

（２）　研究主題設定の趣旨

本校の生徒は，授業に対する姿勢はおおむね真面目で活発ではあるが，自らが課題意識を持ち，課題解決に向けて取り組む姿勢も弱く，家庭学習の習慣が十分定着しているとはいえない状況がある。

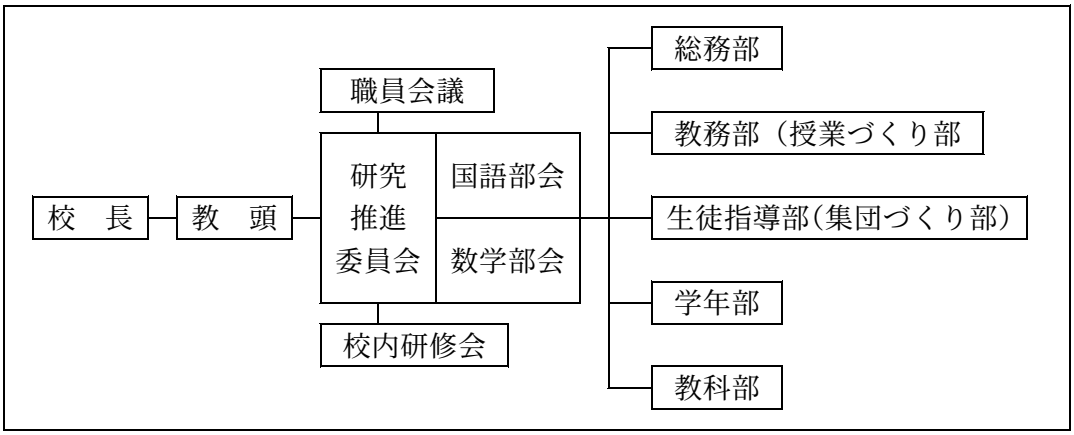
また，ＣＲＴの結果分析でも全国得点率と比較して，国語では「読むこと」，「言語事項」領域，数学では「図形」領域，英語では「会話文での受け答え」，「単語のスペル」，「文の構成」領域等に学習の定着不足がうかがえる。

そこで基礎学力の定着を図るためには，学校の取組みも当然のことながら，家庭との連携を図り，家庭学習習慣の定着を重要課題として取り組んでいく必要がある点から研究主題を「基礎・基本を重視し，意欲的に学ぶ生徒の育成」，副題を～基礎学力の確実な定着をめざす学習指導の在り方～と設定した。

Ⅲ　研究の概要（選択した観点を中心に記述すること）

（１）　研究推進体制の工夫

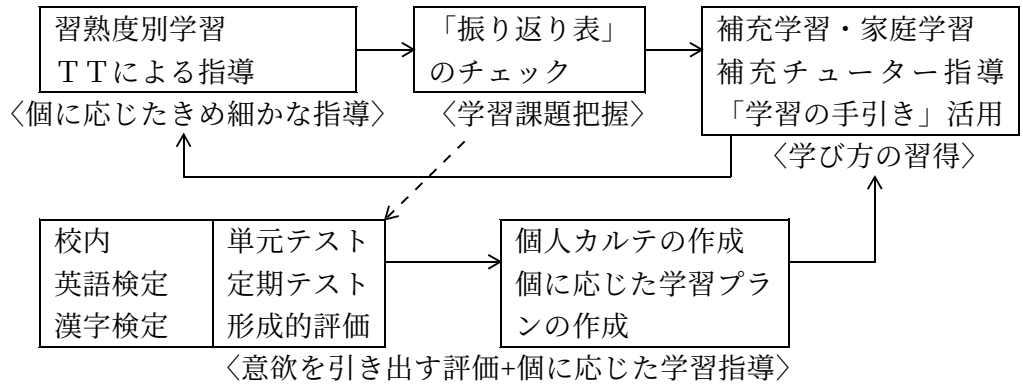
○　研究推進体制



（２）　研究の実際と成果

(1) はじめに

本校の生徒の学力の向上へ向けた取組みの柱として，授業の指導方法の改善と家庭学習の定着があげられる。本校の研究仮説「生徒一人一人の学習実態に基づいた学習プランを作成し，個に応じたきめ細かな指導と評価を行えば，生徒は自らの課題克服に向け意欲的に取り組み，確かな学力を身に付けるであろう。」を具現化するため，次の図のような学習サイクルを作り上げ，学習意欲の向上につなげていった。



(2) 基礎的・基本的な内容がより確実に定着するためのカリキュラムと教材の開発を行う。

①　国語科の取組み（**校内漢字検定・朝読書・音読指導等**）

◇校内漢字検定

昨年度の基礎基本定着状況調査の分析結果から，国語科においては「書くこと」67.9 %，「読むこと」57.5 %と定着が不十分であり，特に漢字や漢語への理解に乏しく，国語に対する正確な知識や理解を妨げている要因ともなっている。そこで校内漢字検定（年間５回）を計画的に行うことにより，生徒が自分の能力に応じて選択し，取り組むことにより語彙力を身につけさせ

た。また，新聞への投書や小論文等（ことばの輝きコンクールへの出品）を書かせる機会を増やし，確実に語彙力が定着するよう図っている。現在の校内漢字検定の状況は別紙資料１の通りである。

◇朝の読書の取組み

生涯読書に親しむ態度を育て，１日の始まりを落ち着いた雰囲気でスタートさせるため，昨年度から朝８：１５分より１０分間好きな本を各自で静かに読むことにしている。「朝の読書に関するアンケート」の結果から次のような記述が目立った。

・以前は字の小さい本は読まなかったけど，今は小さい本長い本を読むようになった
・本が好きになった。・たくさん読むようになった
・家や休憩中暇があれば読むようになった　・漢字力，集中力がついてきた
・速く読めるようになった　・毎日読む習慣が身についた
・朝静かに過ごせる　・読み間違いが減った
・静かなときと騒ぐ時の区別がついた　・本に勇気づけられた
・マンガの小説を買うようになった　・四字熟語がわかるようになった

アンケートでは、大部分の生徒（７０％以上）が「自分の好きな本を読んでいる」ことがわかり，「朝の読書を楽しみ」と感じている生徒が平成１４年度比約 17 ％増加している。さらに朝の読書について「効果を上げている」点については，漢字や言葉の力がついてきた」と答えた生徒が２０％以上増えた。このことから考えて，以前より主体的に朝読に取組み，力がつき朝の読書が定着していることが分かる。このように読書習慣が定着し，活字文化に慣れ親しんでいる様子から，今年度は外部講師（元アナウンサーや図書館司書）を招聘し，コミュニケーション能力の育成を図ったり，読書への関心も高めている。その結果，今年度の定着状況調査では「書くこと」は 93 ％と 35.5 ポイント増加している。

◇音読指導について

音読、朗読、群読、暗唱などの方法を工夫しながら、文章を繰り返し主体的に読ませている。教科書の音読は内容理解のためにも重要なので、なるべく毎時間時間をさき，読む方法は、一人で、ペアで、班内で、学級全体で（挙手・指名・くじなど）など、範囲も一文ずつ、形式段落ごと、意味段落ごと、間違ったところまでなど変化をつけて意欲的に取り組ませている。

1 年生に関しては、教科書教材以外の暗唱をさせている。授業の最初に練習の時間を取り、テストを 1 月に１回程度行っている。出典については次の通りである。

『声に出して読みたい日本語』（斉藤孝著）

4 ～ 5 月「弁天娘女男白浪」「がまの油」「平家物語」「不識庵機山を撃つの図に題す」より 1 つ選択
6 月　「国定忠治」「すゑひろがり」「寿限無」より 1 つ選択
7 月　「五行・十干・十二支・十二ヶ月」（共通）

成果としては，仲間同士で音読するときは教え合いながら楽しく学習している。目的意識を持たせるためにも今後は単元テストは「漢字」編と「音読」編にしていく。また，1 年生は 3 つの文章を全員が暗唱でき、自信につながっている。

② 英語科の取り組み（**校内英語検定等**）

昨年度の基礎基本定着状況調査の結果分析によると，「書くこと」の通過率が 51.6 %ときわめて低いため，単語と文法のスキルアップを図り，基本的な文型を理解させるために校内英語検定を実施している。この検定は，中学校３年間の学習内容を単語と文法に分け，10 段階のレベルで習熟の度合いを測るものである。生徒は，自らのペースで学習に取り組め，その結果を公に認めてもらうことで自信につなげている。また，実用英語検定よりも試験範囲が狭く，校内で小刻みにテストすることでより気軽に英語の力試しができ，英語学習の意欲も高まってきている。さらに，この取組みが定期テストや実用英語検定の結果にもよりよく反映をしている。実用英語検定の受検率は昨年度比 5.3 %増加している。英検３級は 100 %合格を成し遂げた。成果としては今年度の「書くこと」の通過率は，65.7 %と 14.1 %増加している。

	平成 14 年度	平成 15 年度	受検率
受検者	２５名	３２名	平 14
合格者	１７名	２１名	37.3
英検３級	０名	６名	↓
英検４級	８名	８名	平 15
英検５級	９名	７名	42.6

〔別紙資料２　校内英語検定参照〕

(3) 基礎的・基本的な内容がより確実に定着するための指導方法・指導体制の研究を行う。

① **習熟度別学習**（数学科・英語科）

◇数学科の取組み

数学科においては，３年生の生徒に**東郷山コース**（基礎）と**水内川コース**（応用）を選択させている。授業の実施形態については次の通りである。

	実施形態	主な授業内容
パターンＡ （年間 83h）	前半は一斉に授業し，後半は習熟度別に分けて実施	既習内容の問題演習，入試問題演習，単元の導入等
パターンＢ （年間 22h）	５０分間，習熟度別クラスに分けて実施	テスト前の学習，テスト後の補習等

コース選択は，単元テスト後に「振り返り表」をチェックさせ，個人カルテを参考に適切にアドバイスした上で選択させている。振り返り表による自己評価能力を高めながら，生徒自身に適したコース選択が可能になるようにしている。次の表は，単元における自己評価能力の様子をあらわしたものである。A（よくできる），B（まあできる），C（少し不安），D（よくわからない）とし，点数化（4 ～ 1 点）したものである。

［東郷山（基礎）コース］

	展　開		因数分解	
ふり返り平均が上がった生徒	５人	コース全体の平均	１１人	コース全体の平均
ふり返り平均が下がった生徒	１４人	事前 2.63	７人	事前 2.60
単元テストの平均点	62.5 点	事後 2.34	65.6 点	事後 2.65

生徒自身がよくわかっている（できる）と思っていることがテストでできたりできなかったりするわけだが，「展開」では，単元テストを受けてみるとできるはずができていなかったという生徒が非常に多かった。公式を利用した展開ができない生徒も多く，振り返りの評価が低くなったと思われる。

しかし，「因数分解」では自己評価の高まりとともに，力を身につけている様子がうかがえる。

◇英語科の取組み

英語科においては，週３時間の２時間（１時間・ＡＬＴとのTT授業）を習熟度別のクラスで行っている。

基本コースでは,主に単語と文法の指導に力点を置いて指導を行っている。スキルアップの方法として，単語と文法については自作プリントやノートを使った学習を行い，チェックカードをもとに繰り返し定着するまで指導を行っている。また，基本文のなめらかな音読をめざし教科書の繰り返し音読を実施し，ペアでの習熟度チェックを行っている。さらには，個々の課題克服に向けて個別課題を家庭学習等で取り組ませ，放課後や早朝などにチェックを行っている。

応用コースでは，単語と文法の学習後，文法事項の応用問題を解いたり自由英作文に取り組んだりしている。自由英作文については，生徒同士が読み合って相互評価を行っている。音読の面では，イントネーションやアクセントに気を付けながら暗記をめざした取組みを行っている。最終的には，教師と生徒による口頭での和文英訳を実施し習熟度のチェックを行っている。また，家庭学習では問題集を中心に個別目標を設定するなど，生徒の自主性を尊重しつつアドバイスを与えながら取り組んでいる。両コースとも，量的な学力から質的な学力の向上を図る取組みを行っている。 習熟度別学習（英語科）の成果としては次の通りである。

・生徒自らこれまでの学習を振り返り，自分の意思によりクラスを決めることで学習意欲につながった。
・生徒一人一人に充分対応できる人数であり質問にその場で答えることができるので，生徒の疑問をその場で解決できている。
・基本クラスではそれまで全体の場に出しにくかった質問ができ，それをみんなで確認し，理解しながら進めてくことができた。そして応用クラスでは，自己表現を取り入れることで実践的英語を身につけより高い達成感を味わうことができた。
・一斉授業ではあまり積極的に発表できなかった生徒が何人かいたが習熟度別に分けたことで少しずつ自信が持て，みんなで学習していくという雰囲気の中で無理なく発表ができるようになった。
・多くの生徒が定期テストの得点を上げることができた。（得点推移参照）

３年生の「英語の授業がよく分ります。」と回答した生徒は，64.7 ％と昨年度比 17.6 ％増加している。

（定期テストの得点推移）

	昨年度末	1 学期中	1 学期末	2 学期中	2 学期末
3 年〔応用〕A 男	７７点	８１点	８９点	７８点	８４点
3 年〔基礎〕B 子	２４点	４０点	５４点	５１点	４６点
2 年〔応用〕C 子	７８点	８７点	９１点	８１点	７１点
2 年〔基礎〕D 子	３９点	４３点	５６点	５８点	４７点

② **ＴＴによる指導**

◇必修教科におけるＴＴ指導

必修教科（国語・社会・数学・理科・英語等）において，免許外教員をＴ２として個別指導（ピンポイント指導）に携わることにより，個別指導や単

元におけるポイント授業（社会科歴史の文化史を美術科の教員がポイント指導する等），実験や実技の補助を行う等，学習効果が上がるよう工夫し取り組み，確実な基礎学力の定着を図っている。

◇中学校選択教科における習熟度に応じた学習の指導

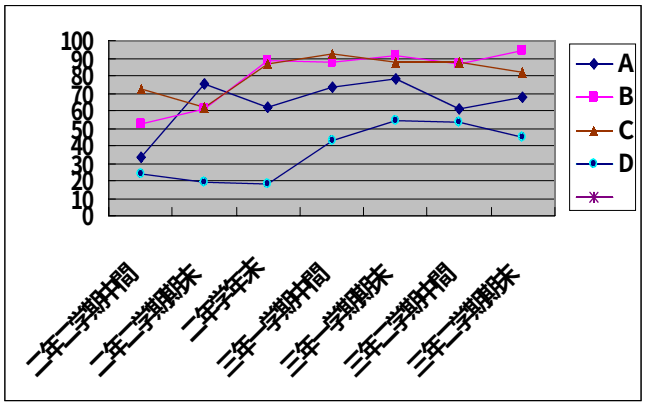
選択Ａ（英語・数学）と選択Ｃ（国語・社会・理科）では補充学習を行っている。特に選択Ａにおいては，免許外教員がＴ２としてピンポイント指導に携わり，Ｔ１との連携のもと一人ひとりの生徒の課題把握に努め，全教職員でかかわる態勢をとっている。生徒の習熟度に応じたプリントを作成することにより，生徒自身が学習のつまずきを早期に見つけ意欲的に解決するようになり，他教科への相乗効果を出しつつある。

③　**補充（チューター）指導**（英語科）

英語を苦手とする生徒を対象に，分かる楽しさやできる楽しさを伝え学習意欲を持たせたり授業をきちんと理解させたりするために補充学習の場を設定し，生徒一人一人に応じた学習の支援を行っている。チューターは主に英語教員が行い，放課後等を使ってほぼ毎日実施している。

内容は，既習の単語と文法の復習を中心とし，文法については口頭試問形式での演習を行っている。また，定期テスト直前指導や校内英検合格のための支援も行っている。11月現在，この学習に参加する生徒は24名で，２グループに分けて指導を行っている。最近では，生徒の中からリーダーが生まれ，そのリーダーがチューターの補助をするなど主体的に取り組む姿勢も出始めた。

成果としては，授業理解度が高まり，グラフのように全体的に定期テストの点数が平均して20点～30点の増加がみられた。また，校内英検に全員が積極的に挑戦し，６割以上の生徒が合格を果たしている。現在は，生徒の進度 に合わせた学習プリントを用意し，自主的に学習を進めている。



④　**フロンティア指導案**による指導方法の改善

今年度は，フロンティア指導案を全教科（講師を除く）で作成して研究授業を行い，教科の教育技術の向上と指導方法の工夫改善を図った。

※フロンティア指導案・・生徒の反応を引き出す授業づくりに取り組むため，指導案の見直しを図った。特に，評価規準に基づいて判断基準を盛り込んだ指導案を作成することにより，指導と評価が一体化するようになり，また細案として，「発問と予想される生徒の反応」と「板書計画」と「学習支援方法」を作成・図示することにより，授業方法の改善が図られるようにしている。今年度は特に授業観察表を作成し，教員による相互評価を行うことにより，日頃から授業観察がしやすい環境を作り上げつつある。その結果，「授業がよくわかる」と答えた生徒は，昨年度と比較して国語科 50 → 89.4 %，数学 82.4 → 84.2 %，英語 47.1 → 89.4 %と増加した。

⑤ 「**学習の手引き**」活用による学び方の習得

「どのようにして勉強したらいいのかわからない。」との声が生徒や保護者からあがっていたので，家庭学習の定着を図るために，まず学び方の習得を視野に入れた「学習の手引き」を作成し，自学自習の習慣の定着を図った。学習上のポイントとして授業への臨み方，家庭学習の方法，試験勉強の方法の３点に絞り，計画的に課題を出しながら継続して学習指導を行った。

その結果，家庭学習時間１時間未満が 63 %から 45 %に減少し，「よく分るように勉強の仕方を工夫する」が 26.5 %から 42.2 %に増加していることから，学びの姿勢が定着しつつあることがうかがえる。

（３）課題

○学び方を習得させ，学習意欲の喚起を図り，自学自習の習慣を定着させるために「学習の手引」や「個人カルテ」を有効に活用し，継続して指導していく必要がある。

○「振り返り表」を定期テストや単元テスト等の事前に行うことにより，学習課題を早期に明らかにし（授業後に振り返らせることも含めて行う），教科担任による学習指導は当然として行い，さらに担任との連携による情報交換を行い，教育相談週間（定期テスト前２週間）において，生徒との面談を通し適切に学習指導を行っていく。

○個人カルテの質的充実を図り，個々の学習プランにつながるものを作成していき，個人カルテを活用して，ピンポイント指導や課外チューター指導，家庭連携による自学自習等との連動により，着実に基礎学力の定着を図りたい。

（４）研究成果の普及の方策

○ホームページによる公開と普及
取組みの具体的事例とその成果等について紹介することで普及を図る。

○研究会開催による公開と普及
平成１５年１０月３日（金）本校において研究会を開催することで成果等の普及を図った。

○フロンティアティーチャーとして第１回呉賀茂北地区協議会において実践報告
第３回広島地区協議会において実践発表を行い，普及に努めた。

○来年度の研究会開催による公開と普及
平成１６年１０月８日（金）予定

◇　次の項目ごとに、該当する箇所をチェックすること。（複数チェック可）

【新規校・継続校】	□１５年度からの新規校	■１４年度からの継続校
【学校規模】	■３学級以下	□４～６学級
	□７～９学級	□１０～１２学級
	□１３～１５学級	□１６学級以上
【指導体制】	■少人数指導	■Ｔ．Ｔによる指導

■その他

【研究教科】 ■国語 ■社会 ■数学 ■理科
■外国語 □音楽 □美術 □技術・家庭
□保健体育 □その他

【指導方法の工夫改善に関わる加配の有無】 ■有 □無

【特色ある取組事例として紹介したいポイント】
英語科における指導方法と評価方法の工夫改善（習熟度別学習，校内英検，チューター指導，個人カルテと振り返り表）により，話すこと，書くことの定着度が昨年比平均２０．７％増加し，英語の勉強がわかる生徒が６０％を達成したこと。